

目次

立山・劔岳の多年性雪渓と氷河 飯田 肇……………1	頭巾山・長老ヶ岳積雪期縦走 (二〇一四年三月一〇日〜一四日) 阪本公一……………4	二〇一四年AACK関東支部・ 笹ヶ峰会合同新年会 山岸久雄……………9	第二八回雲南懇話会(二〇一四年四月 一九日開催)に於ける講演概要等 前田栄三、安仁屋政武……………9	会員動向 ……………11	編集後記 ……………12
------------------------------	---	---	--	-----------------	-----------------

立山・劔岳の
多年性雪渓と氷河

飯田 肇

(富山県立山カルデラ砂防博物館)

北アルプス立山連峰は、日本の山岳の中でも顕著な豪雪地帯として知られ、そこには様々な時間スケールを持つ雪が存在する。春の立山の風物詩である雪の大谷「雪の壁」は、平均で一六mの積雪深に達するが秋には消失する季節積雪である。一方、稜線付近には多年性雪渓(万年雪)が多数分布する。最近の研究から、特に規模の大きな多年性雪渓の中には日本で唯一の氷河が現存することが確認された。

一、氷河の定義とこれまでの多年性雪渓研究の概要

氷河の定義として国際的にしばしば引用されるのは、「積雪起源の雪氷体(雪と氷の大きな塊)で大部分が陸上に存在し現在もしくは過去に流動した証拠があるもの」(Flint, 1971)である。また、日本で広く使われているのは「重力によって長期間にわたり連続して流動する雪氷体」(白岩, 二〇〇五)である。また、昭和初期に北アルプスの多年性雪渓

(万年雪)の氷河学的な研究(今西一九二九、一九三三)をはじめて行つた今西錦司博士は、晩年の著書「四十年の回顧」の中で「氷化した万年雪に可動性さえ認められるなら、これを氷河と呼んでさしつかえない」としている(今西一九六九)。このように、氷河の定義については様々な解釈があるが、多くの雪氷学者は、①降雪からできた雪と氷の大きな塊、②陸上に存在、③流動の三要素を氷河とよばれるための必要条件(成瀬二〇〇八)としている。これらのことを踏まえ、本研究では、多年性雪渓でも厚い氷体を持ち氷体が現在連続的に流動していることを証明できれば、現存する「氷河」であると考えた。

日本では、今西博士の研究以降、立山、鹿島槍ヶ岳、月山、鳥海山、大雪山などで氷体を持つ多年性雪渓が発見された。また、一部の多年性雪渓では流動に関する調査も行われ、現存する氷河が否か議論されたこともある。吉田(一九六四)は、劔沢はまぐり雪で発見された氷体の年層構造から、はまぐり雪が年四m程度流動していて小さいながらも現存する氷河であるとした。しかし、今西(一九六九)は流動を定量的に実測したわけではないので氷河

とは言えないと考えた。また、名古屋大の樋口敬二教授の研究室による剣沢はまぐり雪の観測より、氷体の流動は認められず氷河とはいえないとされた(奥平一九六九)。土屋(一九七八)は、鳥海山の貝形小氷河とよばれる多年性雪渓で氷体の流動を観測し、小規模ながらも現存する山岳氷河であるとした。しかし、測点に雪渓上の岩を用いるなどの問題があり定着しなかった。このように、日本の多年性雪渓で氷体が流動していることを直接証明した例は無く、日本に氷河は現存しないというのが雪氷研究者の間で定説になっていった。

二、立山連峰の多年性雪渓

立山連峰の三〇〇〇m級の主稜線の東側には特に積雪が多い地帯が存在する。冬期間、北西の季節風の風下側に多量の吹きだまりが発生し、さらに雪崩による堆積が加わってその積雪深は一冬で二〇m以上に達し、越年して残り続ける。立山連峰には、御前沢雪渓、内蔵助雪渓、剣沢雪渓、三ノ窓雪渓、小窓雪渓等の多年性雪渓が日本で一番多く分布している。

そのうち内蔵助雪渓では名古屋大学等により氷体の詳しい調査が実施され、厚さ三〇mに及ぶ氷体の存在が確認された(山本他一九八六)。一〇月に雪渓を訪れるとまるでヒマラヤの氷河の様な景観で、表面に氷が露出し幾筋もの水流がみられる。水の集まる所には氷の縦穴(ムーラン)が数十個口を開けていて深さは最深で二〇mに達する(吉田他

一九八三)。名古屋大学等でムーランに潜つての調査が実施され、何層もの透明氷層や汚れ層が見つかった。また、5mの深さを境に水中に不整合面が存在し、その上部では氷の結晶粒が小さく雪渓表面に近い水平な層構造をしているが、下部では四〇度以上の急傾斜で下流方向にせり上がり、氷の結晶粒も飛躍的に大きくなっていた。さらに底部では、底の岩石が氷の層に沿って持ち上げられた氷河の流動の痕跡を示すストラスト構造もみられた(飯田他一九九〇)。さらに、底近くの氷中から木片及び葉片を採取し年代測定を行ったところ、約一七〇〇年前という結果が得られた。さらに、不整合面の少し下の層より採取された木片は約九〇〇年前という結果を示した。これらから、下部の氷体は約九〇〇〜一七〇〇年前に形成されたものであると推定され、日本最古の氷河水ということができ(樋口他一九八八)。

これらより、内蔵助雪渓はかつて存在した氷河の水が融けきらずに残存している、いわば「氷河の化石」であることがわかったが、現在のところ氷体の流動が実測されておらず現存する氷河と確認するには至っていない。しかし、内蔵助雪渓の流動の痕跡を残す氷河の存在は、日本にも氷河が現存している可能性を大いに示唆するものであった。

三、現存する氷河

それでは、立山連峰の多年性雪渓の中に定義を満たす氷河は現存していないだろうか。富山県立山カルデラ砂防博物館の研究チーム

(福井幸太郎、飯田肇)は、立山連峰に存在する多年性雪渓の中で特に規模の大きい、立山東面の御前沢雪渓(写真1)、剣岳東面の三ノ窓雪渓、小窓雪渓(写真2)において氷体の厚さと流動の観測を実施した。氷体の厚さはアイスレダーにより、氷体の流動は九月に氷体に達するまで穴を開け固定したポールの先端位置を高精度GPSで継続測定する方法で実施した。

三―一、三ノ窓雪渓(氷河)

三ノ窓雪渓は、剣岳東面の標高一七〇〇〜二四〇〇mに位置し、長さは一六〇〇m、幅は一〇〇mに達する。二〇一一年六月のアイスレダー観測の結果、氷体の厚さは最大で六〇mを超え日本最大であることがわかった(図1)。また、同年九〜一〇月に行った高精度GPSによる観測の結果、一ヶ月間で最大三〇cmを超える比較的大きな水平方向の流動が観測された(図2)。秋期は融雪末期で、積雪荷重、流動速度が最小の時期だと考えられるため、年間を通じて流動している可能性が高い。これらの結果より、三ノ窓雪渓は日本では未報告であった現存する「氷河」だと考えられる。三ノ窓雪渓は急峻な尾根に挟まれ積雪期に雪崩が頻発する。豪雪と雪崩による積雪深二〇〜二五mに及ぶ膨大な量の雪の集積が、氷河の形成に大きく寄与していると考えられる。一〇月になると氷体が露出してクレパスやムーランといった氷河特有の地形が出現する。

三―二、小窓雪渓(氷河)

小窓雪渓は剣岳東面の標高二〇〇〇〜



写真2 三ノ窓雪溪（氷河）と小窓雪溪（氷河）

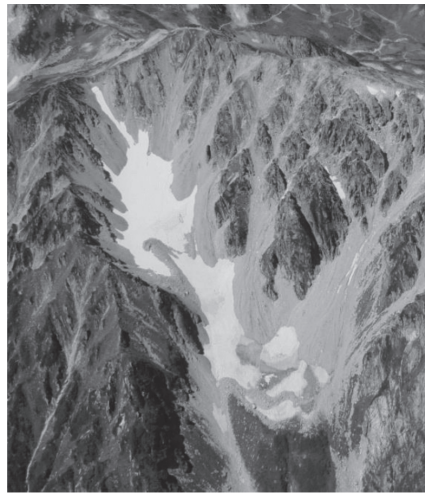


写真1 御前沢雪溪（氷河）

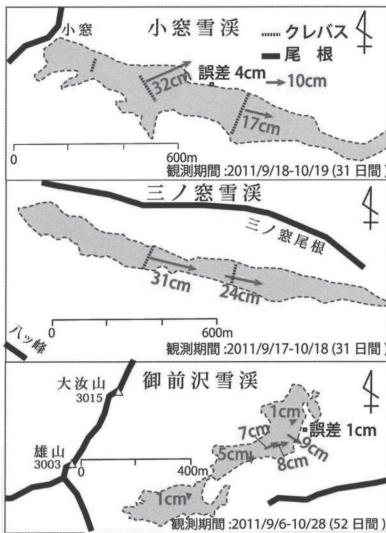


図2 流動観測結果

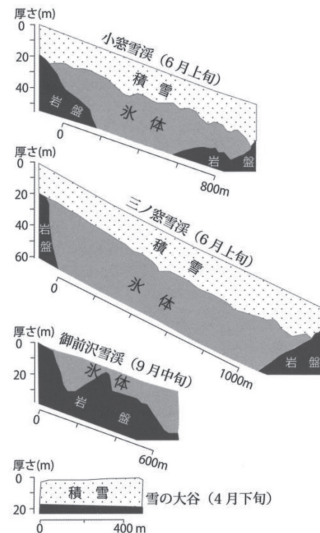


図1 氷体の厚さ

二二〇〇mに位置し、長さは二二〇〇m、幅は二〇〇mに達する。二〇一二年六月のアイスレーダー観測の結果、厚さ三〇m以上、長さ九〇〇mの三ノ窓雪溪に次ぐ規模の氷体の存在を確認した（図1）。また、同年九一〇月に行った高精度GPSによる観測の結果、一ヶ月間で最大三〇cm流動していた（図2）。これらの結果から小窓雪溪も現存する

「氷河」であると考えられる。三―三、御前沢雪溪（氷河）御前沢雪溪は、立山の雄山東面の標高二五〇〇〜二八〇〇mに位置し、長さは七〇〇m、幅は二〇〇mに達する。二〇〇九年秋にアイスレーダー観測を行い、上流部に厚さ二三m、長さ二〇〇m、下流部に厚さ二七m、長さ四〇〇mの二つの氷体を確認した（図1）。また、二〇一〇年と二〇一一年

の秋に高精度GPSによる観測を行った結果、下流部の氷体から一ヶ月あたり一〇cm弱の水平方向の流動が観測された（図2）。流動速度は小さいものの、二年連続で秋期に流動していたことから、御前沢雪溪も現存する「氷河」であると考えられる。

これらの結果は、二〇一二年四月に日本雪氷学会に学術論文として投稿、受理され、立山・劔岳の三つの多年性雪溪は現存する氷河と学術的に認められた（福井・飯田二〇一二年）。その後、同年六月に日本雪氷学会氷河情報センターの主催で、日本の氷河・万年雪研究に関するシンポジウムが富山市で開かれ、国内の氷河研究者の間で意見が交わされた。その結果、三つの万年雪を「氷河」と呼ぶことに異議は出なかった（白岩他二〇一二年）。これにより、極東地域の氷河の南限がカムチャッカ半島から立山まで大きく南下することになる。また、これらの氷河は世界的に見れば最も温暖な地域に存在する氷河といえ、今後の調査でその独特の形成維持機構の解明が期待される。

日本の雪溪研究は、今西錦司先生をはじめ、樋口敬二先生、上田豊先生などAACKの先輩方の先駆的な研究により推進されてきました。今回、氷河が現存することを確認できたのもこれら諸先輩方の研究の延長上の成果であり、あらためて先駆者の皆様の見識に敬意を表させていただきます。

主な参考文献

- Flint, R. F. (1971): *Glacial and Quaternary Geology*. Wiley, New York, 892pp.
- 白岩孝行 (二〇〇五) : 氷河の定義・分類・分布・変動。雪と氷の辞典、朝倉書店、東京、二七七―二八七
- 今西錦司 (一九二九) : 剣沢の万年雪に就いて。地球 一一、二六七―二八二
- 今西錦司 (一九六九) : 四十年の回顧。日本山岳研究、中央公論社、東京、三五七―四〇八
- 成瀬廉二 (二〇〇八) : 氷河の変動 陸水の長周期変動。地球の変動と生物進化 新・自然史科学II、北海道大学出版、札幌、一六七―一八六
- 吉田順五 (一九六四) : 立山の万年雪の雪氷学的調査。北アルプスの自然 富山大学学術調査団、古今書院、東京、三五―五四
- 土屋巖 (一九七八) : 鳥海山貝形小氷河の雪氷気候学的研究 (二) ―形態測量と流動観測。雪氷 四〇、一―九
- 山本勝弘・飯田肇・高原浩志・吉田稔・長谷川浩 (一九八六) : インパルスリーダーによる内蔵助雪溪の内部構造調査。雪氷 四八、一―九
- 吉田稔・伏見碩二・池上宏一・竹中修平・高原浩志・藤井理行 (一九八三) : 北アルプス、内蔵助雪溪の氷体部に存在する縦穴の分布と形状。雪氷 四五、二五―三二
- 飯田肇・竹中修平・上田豊・伏見碩二 (一九九〇) : 北アルプス内蔵助雪溪氷体の

内部構造。樋口敬二編：日本最古の化石氷体（北アルプス内蔵助沢）の構造と形状に関する研究。平成元年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、一九―三〇

樋口敬二・山本勝弘・吉田稔・大畑哲夫 (一九八八) : 北アルプス内蔵助雪溪の下部氷体の形成年代について。名古屋大学加速器質量分析計業務報告書 (一)、三三―三五

福井幸太郎・飯田肇 (二〇一一) : 飛驒山

頭巾山・長老ヶ岳積雪期縦走

(二〇一四年三月一〇日～一四日)

阪本公一

京都府南丹市美山町と綾部市及び福井県名田庄村にまたがる標高八七一mの頭巾山（と きんざん）から、京都府南丹市美山町と京丹波町の堺にある長老ヶ岳（九一六・九m）へ、二〇一四年三月一〇日から実働四日、予備二日、最終下山日三月一五日の予定で、積雪期縦走に出かけた。

還暦になった翌年の二〇〇一年から、京大山岳部の同期だった堀内潭さんの賛同を得て京都北山および京都・福井・滋賀の主な県境尾根の積雪期縦走に取り組み始めた。二〇〇七年からは、同年配ながら五・一一の優秀なクライマーであり且つ体力抜群の岡部光彦さんにも参加して貰い、低山樹林の積雪期縦走を毎年継続して実行してきた。

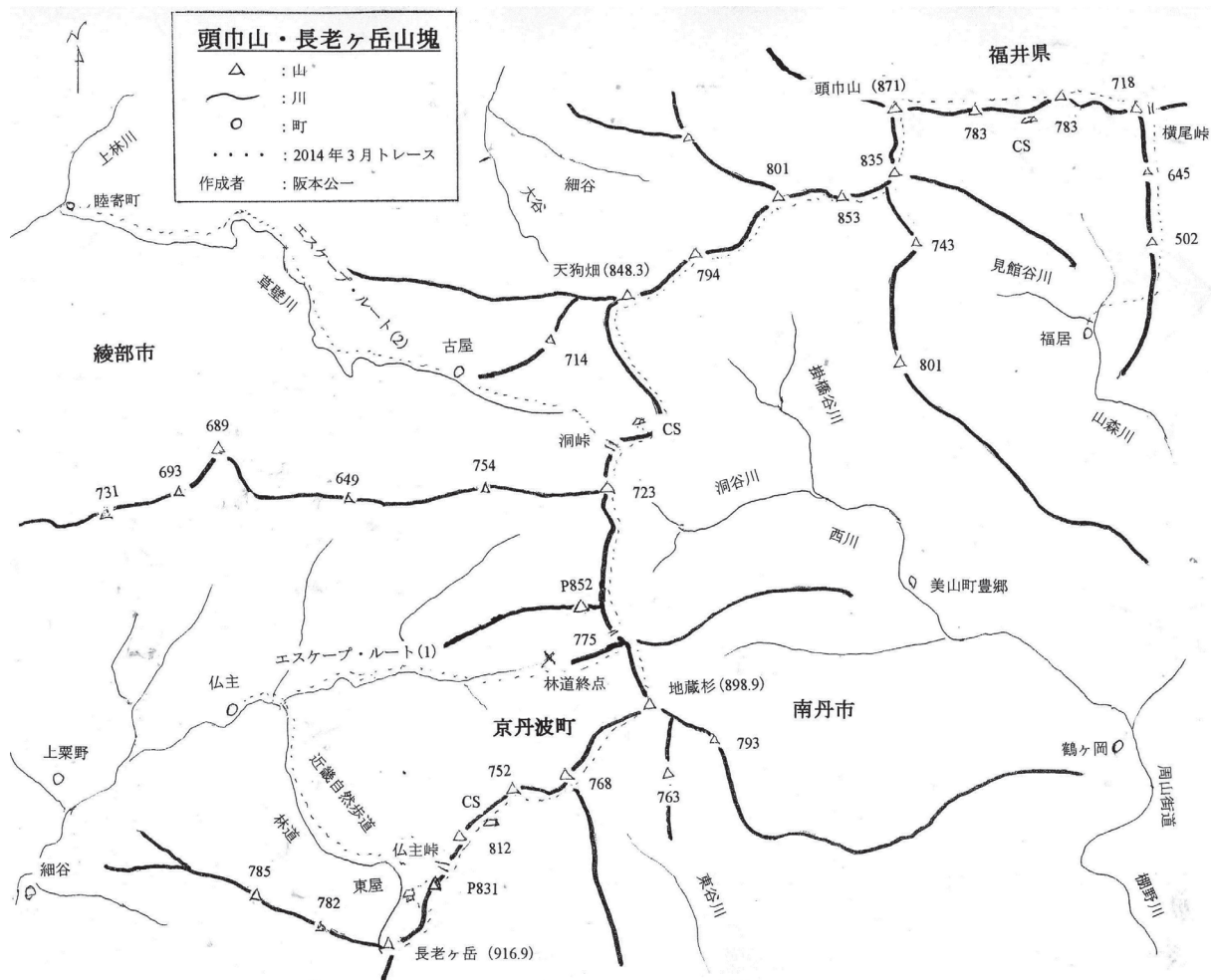
脈、立山・剣山域の三つの多源性雪溪の氷厚と流動―日本に現存する氷河の可能性について。雪氷 七四、二二―二二二

白岩孝行・内藤望・飯田肇・福井幸太郎 (二〇一一) : 氷河情報センター公開シンポジウム報告「日本の多源性雪溪と氷河―これまでの研究と今後の展望―」。雪氷 七四、三五―三五七

昨年までに、この山域の主たる稜線や尾根の殆どを積雪期にトレースしてきたが、頭巾山と長老ヶ岳の稜線の積雪期縦走だけが、私達の最後の課題として残っていた。

長老ヶ岳には無雪期に一度登っており、二〇〇七年二月の第二回厳冬期若丹尾根縦走の時に八ヶ峰から頭巾山を経て頭巾山の南にあるP835迄縦走を行い、その前年秋の無雪期にも同ルートを探察したが、P835から長老ヶ岳までの長い稜線は私達には未知の尾根であった。

小浜山の会の木本茂さんに、頭巾山から長老ヶ岳への積雪期縦走の記録がないか問い合わせたところ、同会では縦走の記録は全くないとの回答であった。ただ、無雪期に頭巾山から長老ヶ岳へ一日で縦走した福知山山の会の記録が、インターネットに掲載されていると教えて戴いた。早速、福知山山の会に問い合わせたところ、二〇一〇年の四月一七日に同会の精鋭三名が、綾部市側から頭巾山に登



頭巾山・長老ヶ岳山塊概念図

り長老ヶ岳まで一日で縦走して仏主へ下山した記録があり、そのメンバーだった塩見忠嗣さんおよび事務局の澤田一正さんから、詳細な状況報告と共に、親切なアドバイスも頂戴した。

昨秋に、上林川の睦寄町から古屋まで車で入り、エスケープ・ルートとして使用しようと考えている洞峠まで登り、天狗畑（八四八・三m）の手前まで偵察。更に第二回目の偵察として、一日目は仏主からの林道終点から地藏杉（八九八・九m）の北の稜線に上がって地藏杉まで登り、翌日には長老ヶ岳から地藏杉を縦走して七七五mコルの南の肩から林道終点へ降りて、仏主へ降りるもう一つのエスケープ・ルートを偵察した。三度目の偵察は、福居村から横尾峠までのアプローチ・ルートを確認する為に、日帰りハイキングを行った。

偵察の結果、地藏杉（八九八・九m）とP768の間にある灌木混じりの痩せた岩尾根の約一二〇〜一三〇m程の通過が、重荷を担いでの積雪期縦走の最大のキーポイントになるのではと思われた。

今回のメンバーは、堀内潭さん（七三歳）、二〇〇七年から毎年同行いただいている岡部光彦さん（七二歳）と私（七三歳）の三名の老人パーティとなり、三人の都合の合う日程で計画をつくった。



P738 西峰近辺よりの頭巾山

ビ・コーティングの針金、針と糸、更に岡部さんが持参しておられた丈夫なナイロン布バンドで何とか修理をして、山行が出来るようにした。

バス停留所の隣の周山タクシード、鶴ヶ丘經由福居の村落へ。タクシードは、少し割り引きして貰って一万円であった。福居村の手前より積雪が急速に増え、除雪をしていない車道をなんとか車で福居村落へ。頭巾山の地図を書いた看板の直ぐ先の橋のむこうが、福居村だ。橋を渡ると、道は左右にわかれる。頭巾山への登り口へは、右の道を進む。風雪の舞う福居村でワカンをつけて、林道を四〇〇～五〇〇m歩くと、お地藏さんがあり、横尾峠への標識が立っている。右手の橋を渡った対岸に村の集会場のような小さな平屋の家屋があり、横尾峠への登山道は集会場の前を通って小さな谷に入る。谷沿いに二〇m程行くと、橋のない小谷を右に渡って、右側の雪の斜面を強引に登ると、登山道のトラス道がようやく出てくる。

横尾峠へはP718の南尾根を登るのだが、P645迄はかなり急登だ。樹林の中を夏道はうまくジグザクにつけてあり、割と歩きやすい。昨秋に私達がつけた赤布テープもついており、迷うことなくP645へ。このあたりから尾根は少し広くなり、傾斜も緩くなる。積雪は一〜一・五m位だろうか。膝ぐらいのラッセルを、交代しながら登る。

横尾峠の手前にお地藏さんがあるのだが、積雪で埋没して隠れてしまっていた。横尾峠に上がると、日本海からの強い風がまともに

吹きつける。峠からは割と広い樹林の尾根になっていて、気持ちの良い稜線だ。日本海から吹き付ける北風の為、稜線の南側には結構大きな雪庇がでている。もう午後三時も過ぎたので、P783東峰を越えたコルの稜線の南側の平らな窪地が、強風を避けられそうなので、樹木の間を整地して幕営する事にした。日本海からの強風が稜線近辺の木々にぶつかり、ごうごうと音を立てているが、稜線の南側の下にある我々のテントは全く風の影響を受けず、快適な幕営地であった。

三月一日(火)：快晴

起床／4:20—CS／6:35—P738西峰／7:30
—頭巾山／8:40—9:30—P835／10:35
—P853／11:27—11:45—P801／2:15
—P794／13:25—天狗畑(八四八・三)／
14:33—洞峠手前のコル／16:15(幕営)。

CS出発前の六時半頃は、朝日が輝きだし、快晴の素晴らしい景観であった。雪はクラストしており、広い尾根を快調に歩きP738西峰を越える。正面のピラミダルな頭巾山の山容がなかなか格好良い。頭巾山ピークの下のお地藏さんは、雪で埋まっていた。最後の急坂を登ると、頭巾山頂上にある祠が目飛び込んで来た。強風の為か祠の周辺の雪は吹き飛んでいた。祠の南下にある避難小屋は、完全に雪に埋没。頭巾山から望む日本海の眺めは素晴らしい。

頭巾山からP835への稜線の下りは、相当きつい傾斜になっている。二〇〇七年二月は雪が少なく、急傾斜の灌木にザックをとられ、

三月二〇日(月)：風雪

JRバス 京都駅／7:50—北野白梅町／
8:15—周山／9:20。

周山タクシード 周山／10:00—福居村／
10:30。

福居村／10:45—横尾峠／14:25—P783東
峰を越えたコル／15:40(幕営)。

JRバスに京都駅から岡部さんが乗車し、堀内さんと私は北野白梅町から乗車した。バスが来る直前に、約二〇kgの荷物をヨイショと担ごうとしたら、ザックの左側の背負い手を支えている太いナイロン・テープがプツンと切れてしまった。取りあえずバスに乗り、周山のJRバス待合室にて、持参していた塩

大変歩きづらかった。今回は一・五m以上の雪で灌木は殆ど埋まっている。が、灌木の枝の空間に出来たゴジラ落としに落ち込んで急傾斜の雪面で転倒する恐れが十分あるので、八mm×四〇mのナイロン・ロープを使用して、二ピッチを慎重に下降した。阪本がトップでありしたが、やはり二度ゴジラ落としに落ち込んだが、ロープのお陰で転倒せずにすんだ。

頭巾山から急坂を降りきったコルからP835への稜線も、やはり傾斜もきつく、ラッセルがあつて非常にしんどい登りであつた。P835からP853は見事な山毛櫸林の、広く明るい気持ちの良い稜線。P801あたりから杉の植林が現れだし、P794近辺迄は樹齢四〇〜五〇年ではないかと思われる立派な杉の大木が立ち並んでいた。P794を越えると、突然杉の木がなくなり、なんの変哲もない天狗畑（八四八・三）のピーク。天狗畑からは単調な同じよう景色の樹林の尾根が続く。洞峠までは、未だかなり時間がかかりそうなので、四時半に洞峠手前のコルに幕営する事にした。高原状の広々としたコルの一段上のテラスに幕営した。西側が、濃い灌木帯になつていて、日本海からの風は完全にブロック出来そうだった。今日は、一〇時間の結構疲れるラッセルの一日であつた。

三月二日(水)：晴れ

起床 / 4:30 — CS / 6:50 — 洞峠 / 7:33
— P723 / 8:04 — P775 / 10:02 — 地藏杉
(八九八・九) / 11:01 — 11:20 — P768 /
15:12 — P752 / 15:52 — P752を南へ降り

たコル / 16:08 (幕営)。

天気予報では今日も天候は良さそうなので、出来れば仏主峠まで足をのばしておきたい。CSからP723への広い稜線の登りを、ラッセルする。P723からだだつ広い稜線を下つてコルにでる。稜線から少し西に外れた地点に、八五二mと2万5千分の一地図に記載されたピークがある。その直ぐ東の主稜線上に、標高記載のないピーク(約八〇〇m位か)があり、P723の南のコルからは、結構苦しい登りのラッセルであつた。七七五と記載されたコルの少し南の肩から、西側の林道終点まで降りている小さな支尾根を、昨秋二度登り降りした。この支尾根を今回の縦走のエスケープ・ルートとして、使用しようと考えていた。

P755のコルからは、地藏杉(八九八・九)までの厳しい登りのラッセル。堀内さん、岡部さんは、息も切らさず膝までのラッセルを軽々と登つていく。地藏杉のピークから、広い尾根が左手の東側に伸びている。昨秋の偵察時に間違つてこの東側の尾根を降りてしまった失敗を思いだし、地藏杉の頂上より南に二〇m程下った地点から西側に急傾斜で降りる主稜線への正しいルートをとる。

横尾峠からつづく主稜線には、「美山トレイル」と書いたオレンジ色のポリプロ・テープが要所の立木につけられており、大きな助けになった。この標識テープがついてなければ、何度かは道迷いのトラブルにおちいつたであらう。

地藏杉のピークから主稜線はかなり急傾斜



快晴のもと P738 西峰へ

の雪面になっており、一步一步慎重にステップをつくつて降りた。コルの手前から瘦せた岩稜が出てくるが、右手にまいてコルにでた。コルからは、約一二〇〜一三〇mもある灌木混じりの瘦せた岩尾根がつづき、今回の縦走のキーポイントだ。

岩登りの得意な岡部さんにトップを頼んで、コルからロープをつけて岩尾根を登る。最初の一ピッチ目は、コルからは約一五mほどドリッジを登り、少し左へ岩稜をトラバースしながら岩頭をまいて雪の稜線にでて、灌木でビレー。

二ピッチ目は、岩稜の上に積もつた狭い雪稜の上を、バランスをとりながら歩き、最後

は岩頭の東側を巻いて、次の小さなコルに降りて、荷物を担いだまま狭いスタンスに立つて灌木で確保。

三ピッチ目は、細い夏道は東側をトラバースしているが、東側も西側も切れ落ちていて、雪の積もった今はとも使えない。雪のかむった岩稜をまつすぐに岡部さんのリードで登る。灌木混じりの岩稜に雪が積もっている、非常に不安定だ。岡部さん、掘内さんが登った後、私と同じステップをフォローしたが、二〇m程登ったところで、灌木の枝の空間に出来た穴に見事に落ち込んでしまった。腰のあたりまで落ち込み、ザックを後ろに見事にひっくりかえってしまった。ロープのお陰で滑落をまぬがれたが、右足のワカンが灌木の枝に引っかかったのか、なかなか抜けない。二三分もがいたが、右足がぬけないので仲間の助けを呼んだが、声が聞こえないのか誰も来てくれない。必死になって、もがきにもがいて、数分後ようやく、右足のワカンに引っかかっていた枝が折れたのか、右足が上がるようになり、ようやく雪面に這い上がった。息も切れ切れに、二人の待つピラー・ポイントに到着。

四ピッチ目は、樹林の間の凸凹の多い狭い雪稜を登り、ようやく荷物を下ろせるような安定した広い稜線にできることが出来た。

ワカンをはいたままでの雪と岩のミックスの岩稜登攀は、バランスの悪い私には、結構怖い疲れるピッチであった。

僅か二〇〇〜二三〇mの長さの岩稜に時間をくいと、その後のP768までのアップ・ダウ

ンのラッセルは結構長く感じられた。P752あたりから、稜線の雪が風で吹き飛ばされたのか地肌が見えるところも現れ出した。もう四時時近くになってきたので、P752を越えて仏主峠との間のコルに幕営する事にした。今日も九時間余のアルバイトであった。

三月三日(木)：風雨

起床／4:30—CS／8:25—P812／9:25—東屋／9:50—9:58—長老ヶ岳(九一六・九)／10:25—東屋／10:45(幕営)。

夜半の午前一時頃より、雨が降り出し、風も吹き始めた。四時半に起床し、朝食をすませて荷物もザックに入れて出発の準備をしたが、雨がいつこうに止まない、テントの中で待機。ようやく雨が少し小降りになってきたので、テントを撤収して八時二五分に出発した。P812を越えてコルにでたが、仏主峠の標識が雪に埋まっていたのか気がつかないままに通過。P812のピーク迄は、稜線の雪が強風で吹き飛んで地肌が現れている状態のところが多かった。P812から次のピークのP831に登り、そこから下ると、林道との合流点にある東屋に着いた。

濃いガスで視界は五〇〜六〇mくらいで、小雨が降り続けているが、長老ヶ岳に登る事にした。ザックを東屋に置いて、空荷で出発。三〇分で長老ヶ岳の頂上に到着したが、濃いガスで展望は全くなし。長老ヶ岳の下山途中から、又風雨がきつくなり出した。

二人は今日中に下山したいとの意向であったが、東屋から下る林道の近畿自然歩道が側

壁からの雪で急斜面になった危険箇所が出てくる恐れもあり、風雨で視界の悪い中を無理して下山するのは得策ではないと二人を説得。食料・燃料も十分残っている、東屋の横に幕営して明日下山する事にした。テントを設営し終わった頃から、風雨は一層強くなった。風がゴウゴウと鳴り、バケツをひっくりかえしたような土砂降りの雨がテントをたたいた。

昼食を済ませ、夕食も三時頃に済ませて、テントの中で濡れた寝袋に入って何することなく時間を過ごした。雨風はいつこうに弱まる様子はなく、小便にできるのも億劫になるような、うんざりする気象条件であった。

三月四日(金)：風雪

起床／4:30—東屋CS／7:00—近畿自然歩道の林道—仏主村／9:30。

南丹町営バス仏主／12:50—JR和知駅／13:25五着。JR和知駅／13:33—京都駅／14:51。

前日からの風雨は夜中になっても止まず。朝方になって四時ごろから、雨が小雪にかわりだした。相変わらず風も強く、ガスで視界も悪い。テントを撤収する時も、テントが吹き飛ばされないように、神経を使って撤収した。

近畿自然歩道の林道は、三ヶ所ほど側壁からの雪が崩れていて、傾斜のきつい雪面を慎重にトラバースして通過した。標高四五〇m位までおりてくると、積雪は信じられない程少なくなり、林道もアスファルトが

顔を出している箇所が増えてきた。仏主の村落に九時半に到着。村落の雪は完全に消えてなくなっていた。

仏主のバス停留所の待合で、粉雪の舞う寒い三時間余、バス待ちの長い時間を過ごした。大きなバスが時間通りやって来たが、仏主からの乗客は私達三人のみだった。

三月一日と二日の二日の晴天のお陰で、なんとか頭巾山から長老ヶ岳への縦走を踏破することが出来たが、なかなか厳しいしんどい山行であった。登山届けを提出した南丹警察署がかなり心配しておられたので、帰宅後すぐに無事下山した旨の電話報告を入れておいた。

京都北山の主たる稜線および京都・滋賀・福井の県境尾根の積雪期縦走の最後を、思い出に残る頭巾山から長老ヶ岳への会心の山行で飾る事が出来て、充実感でいっぱいである。堀内さん、岡部さんの二人の素晴らしい仲間、心からの感謝を申し上げたい。

二〇一四年AACCK関東支部・ 笹ヶ峰会合同新年会

山岸久雄

本年一月一六日(木)一八時より、東京都中央区日本橋の東レ社員クラブにて、恒例のAACCK関東支部・笹ヶ峰会合同新年会が開

かれた。参加者は二五名。最年長は並河治さん(一九五一年入部)、最年少は前田浩之さん(一九八六年入部)であった。並河さんは奥様より「行ける時に行っておかないと、」と背中を押していただいたそうで、幹事は奥様に感謝する次第である。並河さんは開会にあたり、関西在住のAACCK長老諸兄の元氣ぶりに言及され、関東の会員も負けずに、とにかく、しっかりと登りましょう、とご挨拶された。今回は特別ゲストとして、学習院、山桜会会長の贄田統重さんも参加され、ご挨拶いただいた。和風中心のおいしい料理と呑み放題のお酒で歓談が続く中、雲南懇話会の前田栄三代代表幹事より活動状況の報告をいただいた。また、アトラクションとして前田浩之さんより、以前勤務していたモンゴルの風物をスライド上映してもらい、好評であった。昨年より原子力研究開発の要職にある松浦祥次郎さんは多忙な中、参加いただいたが、次の予定のため、ここでご挨拶いただき、中座された。その後、年長の会員を中心に、近況を順番にお話しいただいた。横山宏太郎さんは関東圏外の上越市から特別参加され、AACCKニュースレター編集幹事の立場から、ニュースレターへどしどし投稿してください、とのご挨拶があった(本稿も、編集幹事のお勧めにより、書かせていただいています)。やがて閉会の時が近づき、谷口朗さんに締めのご挨拶をいただいた。この後、山の歌を歌うのが恒例であったが、毎年、歌唱指導をしていたいただいている伊藤寿男さんが今回は欠席のため、めばしい方に歌唱のリードを

打診してみたが、どなたも固辞するばかり。それではこれで散会、という流れになった時、どこからともなく彷徨の歌の合唱が湧き上がり、歌声に送られながらの散会となった。

この合同新年会は長らく前田栄三さんが幹事としてお世話されてきましたが、今回、入部年次が四年若い山岸へバトンタッチされました。幹事の若干の若返りにもない、AACCK関東会、笹ヶ峰会の若い世代の方々へお願いです。合同新年会は毎年、一月下旬に開催されます。来年の新年会には是非、お出てください。五〇歳以下には若手割引があります(今回、対象者は前田浩之さんのみ)。新年会に来られるシニア会員は活動的な方が多く、お話を聞くと刺激を受けます。世代間交流を是非、お楽しみください。新年会の会場をお借りするにあたり、田中健一さんにたいへんお世話になりました。幹事より感謝申し上げます。

第二八回雲南懇話会(二〇一四年四月一日開催)に於ける講演概要等

前田栄三、安仁屋政武

第二八回雲南懇話会は、二〇一四年四月、東京市ヶ谷のJICA研究所国際会議場で開催され、一〇二名の参加を得て終了しました。以下、概要を紹介致します。

一、「六七〇歳代のチベット、ネパールの山々」
—シシャパンマ中央峰(八〇〇八m)、二〇〇四、
メラ・ピーク(六六五四m)、二〇一三

日本山岳会評議員、関西学院大学山岳会
南井英弘

二〇〇二年に新疆の秀峰ムスタグ・アタ(七五四六m)を無酸素で登り、八千m峰も夢ではないと意欲が湧いた。二〇〇三年のバルトロ氷河からゴンドコロ峠越えのリーダーとしての厳しい経験から、二〇〇四年に初めて公募登山隊(JAC理事仲間が主宰)に参加し巨峰(シシャパンマ中央峰、八〇〇八m)に登頂し得た。この頃から注目していたネパールのメラ・ピーク。二〇一三年一月に単独登頂を果たしたものの入山以来一二日間連続して雨or雪という悪天候。アタック開始から帰着まで、連続二二時間の行動を余儀なくされたという。この間の反省・教訓・所感の一端を紹介された。また、公募隊のメリツト(テーブル、椅子を備えた大きなメステン、トイレ TENT など)について言及したのが参考になった。

二、「内モンゴル大草原の自然と伝統文化」 —生態移民の事例研究—

千葉大学外国人研究者 那木 拉なき ら
内モンゴル大草原は遊牧地域である。遊牧民たちは遊牧文化を作り、草原で生活してきた。しかし、二〇〇〇年頃、北京で砂嵐の被害が起きてから、中国政府は放牧が砂嵐の原因と指摘し、牧畜を草原から排除する「生態移民」政策が実施された。牧畜民たちは、草

原と伝統的家畜から離され、生態移民として移住させられた。結果、「生態移民」政策は生態環境を回復できなかったし、逆に移住した牧畜民たちを経済的困窮に落とし、伝統的文化を喪失しつつある…として、その間の様子を事例に基づき紹介された。

乳牛を生活の糧とする牧畜の民、彼らの街に隣接して立地する石炭火力発電所など等、その光景は痛々しい。さらに、放牧生活では燃料として重要な資源であった牛の糞が生態移民村ではゴミとなり、大きな環境問題となっているとの報告は衝撃的であった。

三、「大地に根差すチベット医学」

—ヒマラヤの薬草をめぐる—

薬剤師、チベット医、森のくすり塾主宰

小川 康

チベット民族の健康を担う医師としての役割は勿論のこと、険しいヒマラヤ山中から薬草を採取して製薬する薬剤師の役割、祈りを捧げて御加持を込める僧侶の役割、歴史や文学、歌などに精通した学者としての役割、これら全てを担う存在がチベット医である。ヒマラヤの薬草を中心に、多様なチベット文化の世界の一端を紹介された。

山で採取した約四〇kgもの荷(薬草)を背負い飛び石伝いに急流を渡る姿は、「チベット医は命がけ」という講師の言葉を如実に物語っている。さらに、ある薬草を年一回八月の満月の夜、全員で心を込めて作る(製薬)、という話もチベット医学が単に物理的に製薬するものではないことを象徴している。体験

した者にしか分からない世界であろう。問答で鍛えた話術は見事であった。

四、「チベット仏教の世界」

—仏教伝来からダライ・ラマへ—

筑波大学人文社会学系教授 吉水千鶴子

チベット民族には政治から人々の日常生活に至るまで、隅々まで仏教が浸透している。現在でも人口の九〇%は仏教徒であると言われている。今回、チベットへの仏教伝来から一七世紀のダライ・ラマ政権の誕生に至るまでのチベットの歴史を話しながら、チベット仏教の世界を紹介された。現在のチベット仏教の骨格である宗派とその教義は大よその時代までにでき上がった。そして、転生生活仏を民族のリーダーと考える仕組みも作られた。チベット仏教とは、政治体制を支える理念であり、他国との外交手段であり、人心掌握の手段であり、哲学であり、信仰の対象であり、人々の心の支えである。この豊かな世界を、端緒に遡ってお話しされた。ともすれば難しい宗教の話を、仏・法・僧という切り口から導入して、非常に分かりやすく説明された。

五、「南極氷床を探る」

—氷床内陸探査史と氷床深層コア研究の成果—

国立極地研究所名誉教授 渡辺 興亜

南極大陸上には面積約一二〇〇万平方km、平均の厚さ一八五六mの雪氷層が分布し、巨大な氷床を形成している。南極大陸内陸部は国際地球観測年(一九五七—五八)以前には

地図の空白部であった。我国の南極観測は第一次隊から果敢に内陸探査を行い、昭和基地南方「みずほ高原」の自然を明らかにしていた。講演者らの構想に基づく研究計画は一九七〇年代の「エンダービーランド雪氷総合計画」を嚆矢とし、一九八〇年代、一九九〇年代と二つの計画に引き継がれ、現在では「みずほ高原」の地理、気候、雪氷学的状態を明らかにし、みずほ高原最源流の「ドームふじ」での深層氷床掘削（三〇〇〇m深）に成功し、過去七二万年の地球気候・環境変動の再現に成功している。この研究への道筋を、南極の発見・探検から始まり多岐に亘るトピックスを交えて紹介された。

第二九回雲南懇話会の予告

一、日時…二〇一四年六月二十八日（土）

一三時～一七時三〇分、その後茶話会

二、場所…JICA研究所・国際会議場

（東京・市ヶ谷）

三、内容（講師、演題など変更ある場合は、ご了承ください）

①「私の山旅、天山&アルタイなど」

—ハン・テングリ（七〇—〇m）、ペルーハ峰（四五〇六m）他—

日本山岳会、パミール・中央アジア研究会
坂上 光恵

②「鉄器文化、石製鋳型を用いた鑄造技術」

—四川省俄亜郷における納西族の民俗調査より—

奈良県立橿原考古学研究所 宮原 晋一

③「水・草・家畜からみた遊牧システム」

—モンゴル国首都近郊牧畜民の事例から—
千葉大学文学部准教授 児玉香菜子

④「ミャオ族の歴史と文化の動態」

—中国南部山地民の想像力の変容—
慶應義塾大学文学部教授、
日本山岳修験学芸会会長 鈴木 正崇

⑤「果物のふるさと、西域（伊犁）」

—リングゴの起源地での保全活動—
NPO法人西域生態系保全フォーラム、静岡
大学山岳会、静岡大学名誉教授（植物繁殖学）
大石 惇

会員動向

新入会員

編集後記

近くの山の残雪の帯がしだいに細くなり、かわって緑が濃くなってきました。妙高山の雪形、「はねうま」は、もう形がはつきりしなくなってしまうました。梅雨入り前の好天、夏のような高温にまた寒気と天候の変化は激しいようですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

第六九号では、まず飯田 肇さんに、「立山・劔岳の多年性雪渓と氷河」と題し、研究史を含めた解説をいただきました。この山域に氷河が現存するという論文が、一昨年の「雪氷」（公益社団法人日本雪水学会会誌）に掲載され、大きな話題となったので、新聞やテレビでご覧になった方も多いでしょう。飯田さんが、ともに研究された福井幸太郎さんと連名で秩父宮記念山岳賞を受賞されたことは六七号でお知らせたとおりです。

阪本公一さんには、頭巾山から長老ヶ岳の縦走の記録をいただきました。十年以上にわたる北山などの積雪期縦走の最後の課題として残っていたというこの計画を、「会心の山行」として終えられたこと、ほんとうにおめでとございます。なお記録はA A C K ホームページにも掲載されており、数多くの写真がカラーで添えられていますので、ご覧ください。

山岸久雄さんには、恒例のA A C K関東支部・笹ヶ峰会合同新年会の報告をいただきました。さらに多くの方が参加されるようにな

ればうれしいことです。

前田栄三さん、安仁屋政武さんには四月に行われた第二八回雲南懇話会の報告と、六月に行われる次回の案内をいただきました。毎回、多彩な興味深い内容です。

原稿をお寄せくださった皆様、たいへんありがとうございます。今回は連休を考慮していなかったため発行が遅れたこと、お詫び申し上げます。

編集人としては、これまで縦書きスタイルで来たニュースレターですが、横書きにしてもよいのではないかと考えています。この点についてご意見がありましたら、横山（原稿送り先と同じ）までお寄せください。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 二〇一四年七月十六日

発行日 二〇一四年六月十五日

発行者 京都大学学土山岳会 会長 松林公蔵

発行所 〒606-0801

京都市左京区吉田本町（総合研究一号館四階）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究

研究所 竹田晋也 気付

編集人 横山宏太郎

製作 京都市北区小山西花池町一―八

(株)土倉事務所